

いじめに関する一考察：

本田時雄・高橋 啓

Multidisciplinary Perspective on Bullying

Tokio Honda・Hiraku Takahashi

1996年度の教育研究集会で、いじめを含む不登校が大きく取り上げられ、「学校へ行かなくても良い」権利などが話題となった。

「いじめ」の問題について我々は、学校という教育機関の内部で起きる教育問題、もしくは、子どもたちの人間関係を形成する過程での問題の一つとしてとらえている。しかし、これまでの我々は、「いじめ」という行為を問題として認識していながら、行為の抜本的解決や根絶というようなことには到っていない。これは「いじめ」が「悪」であるということを我々は認識していながら、その行為自体は発生させる決定的原因というものの特定できぬためであり、「いじめの背景」を把握できずにいるためと思われる。また、我々は「いじめ」行為自体を発生させる決定的原因というものを特定できていないが、確実に行為自体は時代によりさまざまな形へと変化することを繰り返しながら現在に至るまで行われてきている。これは差別と同様のことと考えることはできないだろうか。差別が社会悪でありながらいかに時を経ても社会の中から消え去ることがないのは、それが「社会のひずみ」から生まれているものであるならば、子ども達の社会にも同様に「社会のひずみ」が存在すると考えられる。もしもそこに「いじめ」という行為も含まれるのであれば、教育問題としていかに「いじめ」をなくす努力がおこなわれても、氷山の一角を取り除く行為にすぎないのではないだろうか。このことは、これまで行われていた断片的な問題認識の在り方を改め、新たにより広い視点から「いじめ」という問題を見つめ直さなくてはならないことを意味していると思われる。

1 社会と個人との関係

社会と個人は渦巻き状のらせんのような形の深化構造でつながっていると仮定する（図1）。

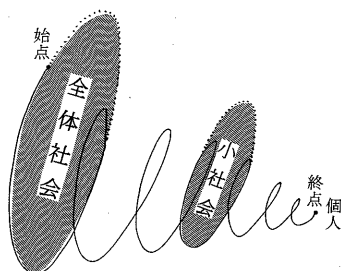


図1 社会と個人の関係

始点から大きくカーブを描きながらつくられるだ円は全体社会を表す。個人の方向に向かいながらつくられていくこの楕円は、個人により近い存在の小社会であり、そのようにしながらいずれたどりに着く終点は、ひとりの個人を表している点である。つまり社会と個人との間には密接な関係があり、それは不可分なものであると考える。したがってこの場合、社会での出来事は個人にも大きな影響として伝わる可能性があり、また、社会も個人によって大きく影響される可能性もそこには存在しているといえよう。「いじめ」についてあてはめるならば、個人とはもちろん「子ども」であり、全体社会と個人の間位置する小社会は子どもたちとその外的環境から造りだ

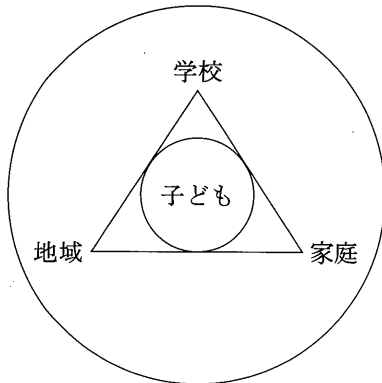


図2 小社会 (=子どもの周辺社会)

される「子どもの周辺社会」がそこにあてはめられる。ここでいう「子どもの周辺社会」とは、子どもを中心に「学校」「地域」「家庭」でつくられる小社会を意味する(図2)。

子どもの日常生活における行動プロセスを考えた場合に、ほとんどが「学校」「地域」「家庭」の間の活動で一日を終えると推測される。子どもにとっての社会は非常に狭い。唯一大人社会との接触が可能で、その出入口となりえるであろう「地域」という外的環境にせよ、現実的には地域間での人間関係は弱体化、希薄化の傾向にあることを考えれば、「地域」には地域環境としての役割しかその働きはない。このことから、

この三つの外的環境から形成される閉ざされた社会が、大部分の子どもにとってのより密接な社会であり、子どもにとっての小社会としてあてはまると考える。

この小社会も含め、個人と全体社会は深化構造でつながっているが、表面的には小社会も個人も全体社会の一部であると考え(図3)。

これは全体社会と子ども社会が世代間で断絶している訳ではないことも同時に示している。

これまで社会と個人との関係についての考え方を述べてきたが、それはすなわち、「いじめ」の問題については、単に学校や子どもだけの教育問題としてとらえるのではなく、大人が形成している社会のひずみ、もしくは大人社会自体が、子どもの社会において「いじめ」などの形で現れている、自分たちの社会自体が抱えている問題であると認識しなければならないことを意味していると思われる。そのため全体社会を視野に入れて「いじめ」を考察し直す必要性はここに起因していると考えられる。ここで重要なのは時間軸という社会についての考え方である。時に社会は縮小し、拡大するが、特に時代の変化は文化や環境など社会を形成するあらゆるものに対し影響を与えている。当然、全体社会の中に存在する「子どもの周辺社会」、そして子どもにも影響を与えることになり、社会それ自体とは別の形で、文化や環境などの要素も子どもと「いじめ」の問題に少なからず影響力をもっていると仮定することができよう。

このような事柄から想定される「いじめ」の背景をつくりだしている数ある要因の中から、小社会としての「子どもの周辺社会」として、「家庭」「学校」「地域」の外的環境と時間軸を視野に入れた社会全体としての「社会構造」の四つそれぞれが、最低限度の要因として考えられる。

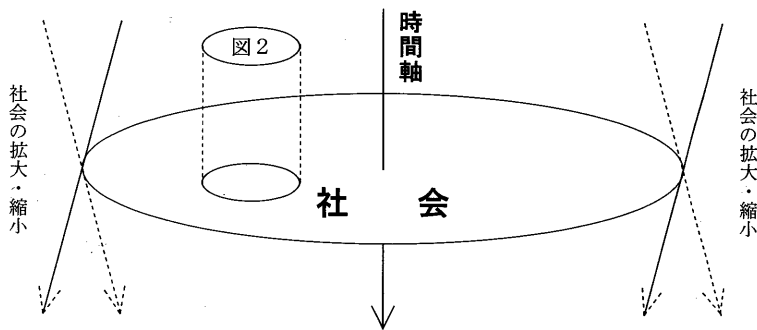


図3 全体社会と小社会の関係

2 家庭

「家庭」という要因の抱える問題点としては、核家族化の進行、家族機能の縮小、家族生活の個人化・個別化等が指摘される。

同質より異質、集団よりも個の確立という社会の流れは、家族形態にも現れてきていると思われる。この流れはこれまで、世代間で同居する大家族形態から、両親と子どものみへの核家族化傾向のことを指していた。だが、今日の社会においては、死別という不幸な場合を除いても、未婚の増加、単身赴任などによって父親もしくは母親の存在しない家族形態の形成は珍しいものではなくなりつつある（アメリカでは、実の両親のいる家族は50%以下と言われる）。このことは既に核家族の解体、もしくは崩壊というところにまで家族の形態は進行し始めていると考えられるのではないだろうか。また、こうした核家族世帯の最大の欠点としては、以前から異世代間の日常的交流の欠如にあると言われてきた。確かに異世代間の交流欠如は、世代あるいは時代による異なる価値観の存在を認識しにくくさせる。ひいては他者の価値や志向を認めにくい性格を生み出す危険性をはらんでいると推測される。

また、核家族であるがゆえに、共働きなどで両親が不在になりやすい環境にある現在では、育児の問題、経済的問題などから、子どもは少子化の傾向にある。こうした少子化の社会では、子どもにとって良きライバルとなり得るはずのきょうだい関係が成立せず、その結果、きょうだいゲンカによって大いに学習されてきた、人との上手な争い方を幼いうちに習得することができずにいる子どもが多数を占めると予想される。そのうえ少子化傾向にある家庭では、親が愛情を注ぐべき存在の子どもが限定されるため、子どもが多分に甘やかされて育つ傾向にあるとも推測される。こういった状況が、適切な人間関係のスキルの不足した人間を生み出す基盤となっているのではないだろうか。さらにこうした核家族、少子化傾向にある家庭では、子どもに生活の孤独感、孤立感を容易に深める恐れが十分にあることも指摘したい。

家族機能の縮小の一因として母子関係の変化を挙げたい。現在は、核家族化や時代の変化の急激さなどによって母親の学ぶべきモデルがきわめて少なく、親子関係が良好でないことが多い。

①女性の社会進出が進んだことで幼児期に子どもと十分な関係を構築することができず、②母親自体も精神的成長を遂げられなかったり、「母親」としての自覚、責任が欠如したまま子どもと接し、③その結果、特に幼児期において、子どもが十分な愛情を母親から感じることができない危険性があると思われる。少子化傾向にある家庭では、子どもが多分に甘やかされて育つ傾向にあ

ると推測される、と先に述べた。しかしそれが、子どもが実際に親から、特に母親から受ける愛情としてとらえるだろうか、ということをごここでは述べたい。問題を起こす子どもほど愛情に飢えているというのも一概に否定できない現実がある。しかし、その親は子どもの愛情不足感を実感できないのではないだろうか。親と子どもの間で愛情のすれ違いが今日の家庭では起きていると思われ、子どもの愛情不足感は今後より進行していくと考えられる。

また、愛情過多（過干渉のことが多い）もまた問題である。1995年に大学生を主な対象として行った中学時代の「いじめ」に関するアンケートの結果では、「いじめ」において被害者、中心的加害者であったと回答した役割群では、家庭に関する質問〔「(親は)子離れしていない」の項目〕において、親は「子離れしていない」と子どもが考える傾向にあった(図4)。

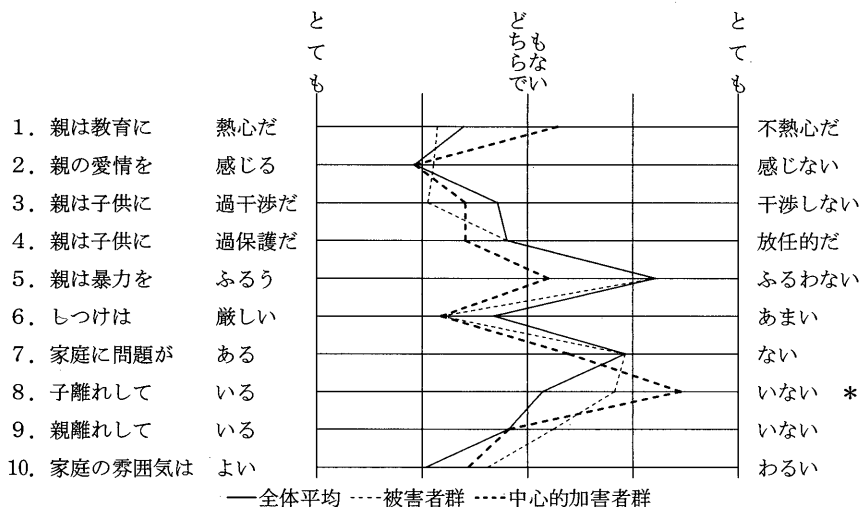


図4 中学時代の家庭環境

「いじめ」の行為が発生した際にその行為の中心的役割を果たす加害者、被害者とも、自らの親の子離れ度の低さを訴えている。このことは、親には子どもの精神的独立を正しく見極める力が必要であることを意味し、見極めを誤ったり、そのこと自体に親が気づかないでいると、子どもは親の愛情をストレスとして受け止めることになる。子どもが親から受ける干渉のストレスが、「いじめ」を行う原動力になったり、逆に標的となりやすい言動を子どもの中に生み出す可能性があることをこのアンケート結果は示唆している。これらのことから、親の愛情不足、愛情過多ともに、子どものストレスの要因となることを示しており、親という存在自体も成長・独立が必要であると指摘できる。両親の精神的独立も子どもと接して行くうえで重要視しなければならないだろう。

また、別の満足度に関する問いにおいて、「家庭」への満足度に関して被害者群は他の役割群に比べ低い値だった。その次に低い値を示したのは中心的加害者群であり、逆に満足度が高かったのは、追従的加害者と観客の役割群であった(図5)。「いじめ」において直接的な役割を果たす役割群よりも、「いじめ」に間接的に、後発的に参加する役割群のほうがリスクが少なく、自己の欲求を比較的容易に満たすことが可能であるために、このような形で満足度に差があらわれたものと思われる。その点で中心的加害者と、被害者となりうるものには家庭において共通の原因や因子が働いているとこの結果から推察された。

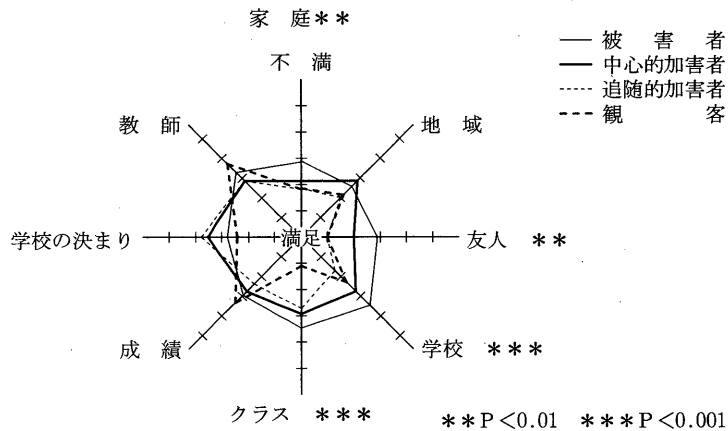


図5 中学時代の満足度

このように「家庭」、特に今日の「家庭」には子どもに影響を与えるであろう多くの問題となる要因が存在する。それが「いじめ」という行為にも結び付いていると思われる。

3 学校

子どもの日常生活のほとんどは、学校にいる時間で占められている。一日の中で家庭で親と共に過ごす時間よりも多いことを考えれば、子どもにとっては狭い世界観しか構築できぬ状況下にあるといえよう。したがって、この狭い世界観の中の学校という存在は、大人が思うよりもはるかに意味があり巨大で、子どもの社会にとって重要なものである、と子どもは認識していると思われる。

「いじめ」の問題が、今日も大きな社会問題となっているのは、「生きる力」がつけられず「いじめ」の行為に伴って自殺する子どもが一時期続いたからではなく、子どもに知識と学習する能力を身につけさせているはずの学校という育成機関の中で、「いじめ」が始まり、有効な手段を講ずることができずに、「いじめ」や自殺を阻止できずにいるためではないだろうか。会社の中で「いじめ」を苦に自殺がおきようと、社会病理の一端として片付けられ、社会問題として一般の人々の間の共通認識には至らないであろう。これらのことから、子どもに限らず一般の人々も学校の存在は社会にとって重要なものである、という認識をしていることがわかる。

現代の学校は、受験という唯一絶対的価値が最終的には支配する空間であるといえる。それは子どもに、クラスの友人＝敵といった見方を成立させる危険性がある。つまり、ある一面から学校で生活する子どもを見た場合に、常に敵に囲まれた生活を送っているという見方が成立すると考えられる。もし、この学校生活の一面がほんの一部でも真をとらえたものであるならば、学校という社会でのつまづきは、子どもの生活にとって重大なダメージとなることが推測される。仮に、「いじめ」などにより、学校において他者の負のエネルギーを多数から受けるような状況に陥れば、子どもにとっては死にも等しいダメージを受けたと感じ、錯覚してしまう危険性が存在すると思われる。とすれば、子どもにとって学校は、弱肉強食の世界を体験する空間であり、「いじめ」を増殖させる温床の一面が学校にあることは否定できないことのように思われる。

今日の学校制度として行われている、6・3・3・4制という、すべての子どもが大学にまで進む権利を与えるという教育制度は、人材を育成するという意味では多大な成果を挙げた。しか

し、人々の学歴信仰という錯覚のもとに偏差値教育、受験競争を生み出したことも事実である。特に教育現場は、社会や保護者の要求をそのまま受け入れたために、学校信仰、学歴信仰、偏差値教育、受験競争などを追認することによって、学校を子どものストレスを増殖させる温床にしてしまったのではないだろうか。

前述した中学時代の「いじめ」に関するアンケート結果によれば、回答者に中学時代の相談者の有無を問う質問において、被害者群だけは他の役柄群と異なり、「友人（学校内）」に「相談しない」とする傾向があった（表1-1, 1-2）。これによって被害者群は他の役柄群よりも友人

表1-1 中学時代の相談者

(単位：人数)

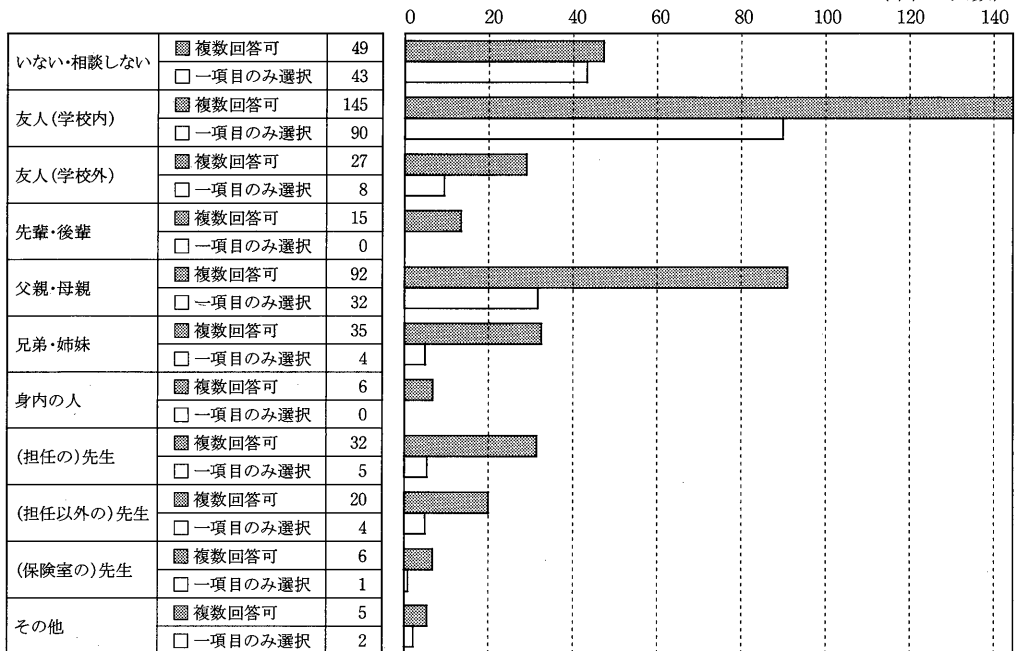


表1-2 クロス集計とX²検定(表1-1の部分)

質問「友人(学校内)に相談するか」

	被害者	中心的加害者	追隨的加害者	観客	制止者	通報者	傍観者	他
相談する	6	3	6	3	8	1	59	51
相談しない	11	2	1	4	2	0	32	13

(X²(9)=0.036, P<0.05)

関係の希薄さが証明され、「友人」の有無、信頼できる「友人」の存在、サポートの有無が「いじめ」の被害者になり得るかどうかの、要因になっているとここから考えられる。また、自分が所属していたクラスについて、「大切なクラスか、どうでもよいクラスか」の質問項目において、「いじめ」に対して能動的な影響力をもつ者(中心的加害者、制止者の役柄群)や、距離を置くことが可能な者(傍観者、いじめはなかった者の役柄群)にとっては自分のクラスは「大切」だと感じていた傾向が強かったが、被害者、追隨的加害者、観客、通報者の役柄群などにとってクラスは「どうでもよい」存在と感じる傾向にあった(図6)。

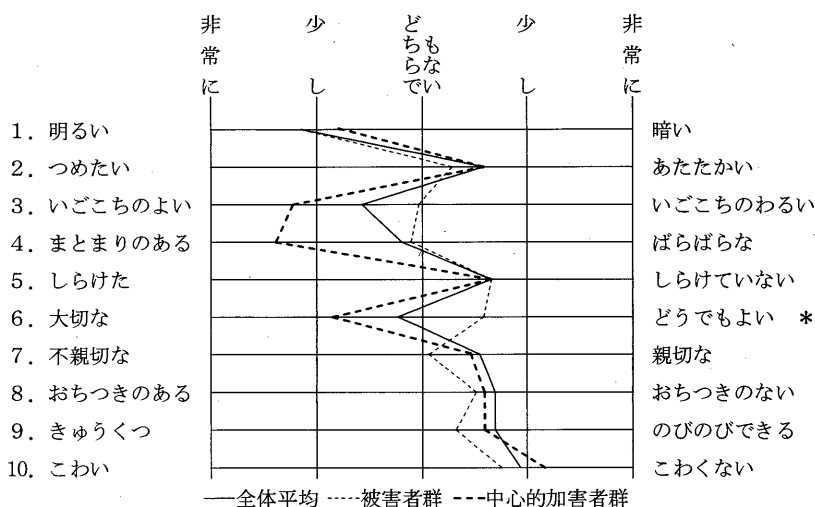


図6 所属クラスの印象

「いじめ」の有無や、クラスに対する自己の影響力の有無は、自分のクラスが大切なクラスであるかどうかの判断に影響を与えており、あるいはクラスを重視しないからこそ「いじめ」が発生したり、適切なサポートが得られないと考えられる。前述した「家庭」の満足度に関する質問（図5参照）でも、学校とクラスの項目は、家庭の項目と同じく、被害者群と中心的加害者群は他の役柄群に比べ低い値にあり、追隨的加害者と観客の役柄群は満足度が高かった。このことから学校、クラスも家庭と同様に、中心的加害者と、被害者となりうる共通の原因や因子が働いていると推察される。

良好な友人関係、クラス全体において共通の価値を持たせる良好な学級経営、これらを可能とすることが、学校を子どものストレスの温床化から防ぐことに有効であることがこの結果から考えられる。このような環境形成に最も多大な影響を与える存在はやはり教師である。新たな学力観に基づく授業の在り方、学校5日制の実施など、地域やPTAなどとの連帯を密にし、マイナスの温床を一掃しようとする努力が最近の教育現場には伺われるが、しかしながら、同時に今後は生徒に直接接し、学級や学校を実質的に経営する、一人ひとりの教師の存在が大きく問われることになるであろう。学校は児童・生徒が主役であるが、子どもを生かす学校を可能にするものは有能な教師の存在である。教師が学校という生活空間の中で、「いじめ」、その他の問題に最も密接により深くかかわりがあることは常に重要な事柄である。

4 地域

現在の社会の在り方は、異質性の増大と連帯性の弱体化が進み、相互扶助関係の衰退と地域集団の解体を推進していると考えられる。

都市においては、地域流動性の高い住民によってその地域の社会が構成される。そのため、村落型の地域社会に比べると、地域の結合力ははるかに弱い。また、都市における生活者は、生活目標・ライフスタイル・価値意識などの面で様々なものをそれぞれに抱えており、地域社会内の異質性は顕著である。プライバシーの尊重、相互不干渉の社会的態度を特徴とし、人的交流も多くの場合、表面的関係にとどまっている傾向にあると思われる。確かに、村落型の地域社会の共

同体のような画一的、統一的な地域社会では、結び付きが強固すぎるため、移住者の参入を認めず排除する傾向があるなど、村落型地域社会にも問題点が数多く存在する。しかし、かつての地域社会には、現代の都市型社会には存在し得ないような、地域独自の異年齢集団の仲間関係と独自の子ども文化、そして自律的子ども社会もまた存在し、そこでは子どもは、人間関係や社会についての学習を自然に行うことが可能であった。しかしながら、今日の地域社会には、このような地域独自の教育力や人間形成力が衰弱、そして消滅し、地域社会そのものも都市部においては消滅しかかっているといえよう。

地域及び、地域社会を今、重要視されなければならない理由は、子どもの「いじめ」が学校という枠組みの中の学級やクラブといった狭い人間関係の中から発生するのに対し、「いじめ」に伴った自殺などの事件化したものの多くが、学校以外の地域社会の中で発生している所にある。地域の中での子どもの暗部を見抜ける力、地域独自の教育力や人間形成力を再び生み出す力が必要とされている。

5 社会構造の変遷

日本の社会構造の変遷を考える場合、(1) 戦前及び戦中の社会と、(2) 戦後の近代社会(1960年代まで)、(3) 現代社会(1960年代以降)の3つに区分することが一般である。

(1) 戦前及び戦中の社会は、画一的価値観への従属意識が人々を支配している社会であり、それらに対してすべての個人が貢献することを唯一の価値とし、互いに助け合うということを日本型集団主義の思想としていた時代と想定できる。

(2) 戦後の近代社会は、それまでの理想や象徴としての画一的価値観と現実としての多面的価値観が交錯する矛盾の中にあつた、日本社会の進路を模索していた時代として捉えられることができよう。敗戦により絶対的権力機構が消失し、従属するものを失った混とんの時代だが、個人の力を発揮することが最も可能であつて、日本社会が最も多くの選択肢を抱えていた時代ではないだろう。

(3) 現代社会は、戦前、戦中以来の画一的価値観への従属意識は後退し、人々にとって価値は多元化したように思われている。だが、かつての日本型集団主義の中から順応主義という性格だけを残し、個人の新たな連帯の形として「企業」というものに固執する現状においては、社会としての価値観は未だ画一的である。また、個人の在り方においては、助け合う能力・共感する能力を喪失し、個々の利得にのみ終始して、豊かな人間関係をもたない人々が増加し、社会に自己中心主義の思想もはびこらせ、現在の日本の『自分さえ良ければそれで良いとする「無責任」な社会』の風潮を生み出しているものが根底にある。

したがって、このような変遷をたどってきた現在の社会の本質は、戦前、戦中、近代の時代より混とんとした画一的価値観と「無責任」なミーイズムがはびこっており、この動きについていけない社会的弱者は、切り捨てられていく社会である。このように社会構造を時代的に見直していくと、「いじめ」はその姿を縮小した形で、あるいはそのままに、外的環境で形成される子どもの周辺社会と子どもに影響を与えた結果、生まれた社会問題であると考えられる。

6 子どもと「いじめ」

現代の子どもの特徴的な面として、人間関係の狭さ、希薄さ、社会的達成意欲の低さ、などが一般に挙げられる。

これらは、現代の子どもの孤立した生活スタイルに起因していると思われる。孤立した生活スタイルにより、一人で過ごす状態が当然のことになり、友人関係を維持していくことや、友人を求めて行く気持ちが失われ、表面的な付き合いに終始する傾向を生み出すと考えられる。また、競争社会の中に身をおいている子どもにとって、現実の社会の在り方と自分を比較し、人生の先を予想することはそう難しい事ではなくなっている。豊かな社会では最低限生きて行くことが可能であるという社会状況も、子どもの社会的達成意欲の低さを生み出していると推測される。

あきらめが早く、人間関係が狭く、決して本音の部分のみせることのない現代の子どもたちの特徴は、自分の世界を大事に考え、自分を基準に生きていこうとする姿にもとれる。しかしながらそれは、自分の行いに対し責任をとる厳しさと、他人の生き方も尊重する態度を兼ね備えた生き方というよりは、自分本位で他人を否定し、自分の行いに対しては無責任で身勝手な生き方のほうを選択している。それゆえに、一般社会において問題を起こす大人たちの自己中心主義的傾向と、「いじめ」の場面で子供がみせる態度とは非常に通じるものがあるのではないだろうか。

そんな子どもが行う、今日的「いじめ」の大きな心的要因には、①社会的承認および所属の欲求の充足と、②陰惨な気分の発散、が考えられる。

つまり、「いじめ」には「仲間意識の再確認」のための踏み絵の意味合いがあるのではないだろうか。これは真の意味での友情を成立させることができない、人間関係の希薄な現代の子どもの特徴に起因し、自分の感情や本音を見ることができないために、友情自体を持つことができない者同志の集団において、「いじめ」という行為に参加することで敵か味方か、友達であるか否かを確認しているように思われるのである。

また、「いじめ」という行為を行っている子どもには、「だれか」に対して恨みたい心、が存在すると思われる。その陰惨な心を解消するために、虐待すべき「いけにえ」の存在が必要であり、「いけにえ」がだれかということにはあまり意味をもっていない。つまり、大事なことは「いけにえ」という存在を、単に子どもが陰惨な心を解消するためだけに欲しているということにあり、実際に恨みたい存在は全く別なものであるということが多い。それは個々によって異なり、自分の親であったり、学校や教師、もしくは全体社会についてであるかもしれない。臨床心理学的には、加害者も被害者も同じ病理を持つと考えられる。前述のストレスや、こうした恨みの心などの欲求不満を自らの力で上手に解消できず、エネルギー発散の場を「いじめ」へと求める。このようなメカニズムの同じ根を子どもはもつので、昨日まで被害者であったものが翌日からは加害者にまわるという現象が、今日的「いじめ」において容易に見られる理由であると推測される。

いずれにせよ、「恨み心」が蔓延した社会においては、子どもたちの自尊感情は破壊され、他者への共感や思いやりの心が喪失する。そこで形成される子ども達の仲間関係には、友情を中心としたつながりよりも、力関係によって構成されるつながりばかりが強化されると推測される。

以上述べてきた子どもの外的環境、社会構造を見て行くと、それぞれ「いじめ」や子どもとは遠く離れた関係と思われるものでも、じつはよりちかい間柄にあること、密接な関係にあるということに気づかされる。「いじめ」の本質的原因、もしくは誘発する原因をうみだす土壌が、確かに子どもの外的環境、特に「学校」や「家庭」のなかに広く存在しているといえる。やはり、「いじめ」そして子どもの問題は教育問題や発達問題といった断片的な問題としてとらえるのではなく、社会全体を視野に入れた総合的社会問題のひとつとして取り組まなければならない課題で

ある。それは大人子どもを問わず、すべての人々に与えられた共通の課題であろう。

子どもの人間関係の希薄さが、「いじめ」の一つの要因として挙げられると先に述べたが、それでも「いじめ」には「加害者」と「被害者（いけにえ）」という人間関係が成立する。しかしながら、これからの子どもは人間関係の希薄さがさらに進行し、一部の友人を除き、他者に対して、また「いじめ」におけるかかわり合いすらも興味を失って行くと推測される。したがってやはり「いじめ」は起こらず、逆にそのような人間関係の希薄さに耐えられない子どもが増え、「不登校」を増加させることになると推測される。良好な人間関係とは何か、という問いが今後の課題として重要視されてくるのではないだろうか。「いじめ」も「不登校」も学校社会に病理となって現れる全体社会の問題としてとらえられていくと考えられる。

* 参考文献

- 朝日新聞山形支局著 「マット死事件」 1994 太郎次郎社
毎日新聞社会部編 「総力取材いじめ事件」 1995 毎日新聞社
日本子どもを守る会編 「子ども白書95」 1995 草土文化
尾木直樹 「いじめっ子・その分析と克服法」 1996 学陽書房
芹沢俊介 「いじめはどうして起きるのか」 1993 ボーダーインク
土屋守 「500人のいじめられ日記」 1994 青弓社
中日新聞本社・社会部編 「清輝君が残してくれたもの」 1994 海越出版社